

裾野召団創立十周年記念集会 第一回

使徒ヨハネの本質（一）

1989年4月22日（御殿場）

小池辰雄

ヨハネの靈統 無者キリスト 天人 神然・靈然・自然 永遠の生命 「主さま」 真相^{まこと} 「我
を見よ」 聖靈の生命

●ヨハネの靈統

ヨハネの靈統というのがある。ヨハネの靈統は、私の見るところでは、最初に出てくるのは「アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ」のヨセフです。ヨセフがヨハネの靈統の最初の人間ではないかと思う。その次はダビデです。私は、詩篇の中の

「ダビデの…」

というのは決して嘘ではなく、原作はやはりダビデが相当あったと思う。ドイツの学者は全部否定するけれども。ダビデという人は非常に情感の深い人です。その次はエリヤの次のエリシヤです。ヨセフ、ダビデ、エリシヤときて、その次はホセア、エレミヤ、第二イザヤ、そして、ヨハネです。これがヨハネの靈統のように思う。大体、「愛」の深い人達です。キリストは例外です。ヨハネもペテロもパウロも、それから預言者たちも全部キリストに集中するから、キリストは例外です。

今度は、パウロの靈統というと、特に「信」の角度からいくと、アベル、エノク、ノア、アブラハム、ヤコブ、モーセ、ギデオン、サムエル、エリヤ、ヨブ、アモス、第一イザヤ、ステパノ、それから、パウロということではないかと思う。

ペテロで言うと、「愛・信・望」のうちの「望」です。もちろん、どの使徒にもいろんな要素はあるけれども、その傾向性、中心の特色で言うと、ペテロの靈統は「望」の靈統です。これは、イサク、ヨシユア、第二ゼカリヤ、エゼキエル、ヨエル、マラキ、ヨナ、第三イザヤ、ダニエル、それから、ペテロというような人たちではないかと思う。全部がはつきりそうとは言わないけれども、大体そのようなところです。

今日の『使徒ヨハネの本質（その一）』というのは特に「生命」を中心とした話です。マタイ伝は「天国」、ルカ伝は「神の国」、ヨハネ伝は「永遠の生命」、これがカギの言葉になっている。即ち、神の国とか天国のその質は一体何か。それは滅びぎざるところの「永遠の生命」である。



●無者キリスト

私の第十卷『聖書は大ドラマである』の「無者キリスト」の項（10月3日）に、

「父は子を愛してそのなす所をことごとく子に示し給う。…我自ら何こともなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し。そはわが意を求めずして、我を遣わし給いし者の御意を求むるに因る。…汝らは書物（旧約聖書）に永遠の生命ありと思いて之をしらぶ。されどこの書物は我につきて証するものなり。」（ヨハネ5・20、30、39）

特にこの中で今、主題となつてゐるのは、「永遠の生命」ですけれども、この5章30節は私の「無」の、「無者キリスト」の大事な言葉です。

「我自ら何こともなし能わず、ただ聞くままに審くなり。わが審判は正し。そはわが意を求めずして、我を遣し給いし者の御意を求むるに因る。」（ヨハネ5・30）

キリストの在り方の姿はこの一句を中心としているようなわけです。要するに、それは

「御意をなさせ給え」

という言葉です。

「私の意ではない。あなたの御意をどうぞ私を通して成して下さい」

といつて、彼は神さまの前に自分を投げ出している。私は形容詞でものを言つてません。本当に投げ出す。私たちが本当に生きようと思つたら、キリストの前に自分を提身しなければ、投げ身しなければ。そうすると、

「本当にぶつたおれるのか？」

なんて思うが、ただそういつた現象を言つてゐるのではない。この言葉は観念ではなくて、心の、全存在の霊的な姿である。

「どうぞお使い下さい」

といつて自分を投げ出す。

「従う」という言葉がありますが、体裁の良い言葉だけれども、

「十字架の死に至るまで従ひ給えり」

という、キリストの「従う」というのは本当に投身また投身しておられた。「従う」といつたつて、

「まあ、分かりませんから、従つて行きます」

なんて、そんな従い方ではない。

普通、今の人は従う事は嫌いだ。先生の言うことを聞いたりすることが嫌いで、

「皆、自由で自主である」

なんて言う。この「自主」がひとつも本当の自主でない。みんなまちがった自主なんだ。自主も自由も勝手気ままな自主自由になつてゐる。人間は非常に自主自由で勝手気ままな



んだ。動物や植物を勝手気ままに利用している。ゲートが言っている、

「自然を勝手に使っていたならば、そのうちに必ず困る時が来るぞ。自然に親しみ

なさい、自然と融合しなさい、自然の法則と同じような法則で生きなさい」

と。今の文明はゲートの予言の通りになってしまった。今から百何十年前にゲートはもう予言しているんだ。

「空の鳥を見よ、播かず蓄えず、神さまは植物や動物をどのように育てている

か見ろ」

と、キリストが山上の大告白で言ってらっしゃる。あのキリストの言葉が実は非常に大事な言葉です。文化文明が全部、勝手気ままになって、人間の智恵と欲とがからまった文明になっている。それは滅びへの文明である。この「我欲」というやつが悪い。ヤコブ書がちゃんとそのことを言っている、

「その極まりは戦争だ」

という。

我々はこの福音を体裁なんかで語ってられない。21世紀には、このままでいったら人類は滅びてしまう。動物も植物も地球上のものはみんなダメになる。東西両方の核兵器がどうのこうのと、そんな問題ではない。人間というのはなんて馬鹿か。利口のように、馬鹿なんだ。聖書でも「伝道の書」が預言している。

「智恵の増すところ憂いまた多し」

「空の空なるかな凡て空なり」

になってしまふ。学校の先生でも「私は無神論者です」なんて、勝手なことを言うのがいるが、論の世界ではない。

●天人

私は、旧約の預言者たち、新約の使徒たちの他は、私の相手はいません。そういう人たちを相手にして私は生きています。私は罪びとの首です。パウロが

「我は罪びとの首なり」

と言った。内村鑑三も「我は罪びとの首なり」と言った。

第三番目に、私は自分を「罪びとの首なり」と言います。どん底に立ちます。本当の「罪びとの首」は実はキリストご自身です。キリストご自身が「罪びとの首」になって下さった。私は歴史的な選びの人間です。内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎、その次に歴史的にも私はちゃんと来ている。私は自分なんて考えていません。使徒ヨハネ、使徒ペテロ、使徒ヤコブ、使徒パウロが親しくしてようがない。私は自分の号に、みな「天」を付けたのが今になって自分ではつきり分かってきた。私は「天人」なんだ。天の人。地にあるけれども、天の人です。キリストから烈々たるものが来ていますから。



我々の召団はその気魄で臨んでもらいたい。お互いにどうだこうだは、そんなことはいい。キリストに直結する。そうすれば、お互いに助けざるを得ない、お互いに許さざるを得ない、お互いに愛せざるを得ない。みんな「ざるを得ない」世界です。

西郷南州も薩長連合を初めは思案していたけれども、龍馬に、薩長連合をしなければダメだと言われて決意した。私は維新当時の最大の人間は龍馬だと思う。坂本龍馬は凄い奴だ。西郷南州と龍馬です。第一級の、超一級の人みんな仆（たお）れていった。

皆さん、そのような具合に、我々は男であろうと女であろうと、みな使命を持った存在です。一人がその召団を本当に背負っていく。それだけの気合を以て進んで行く。それは絶対に崩れません。私が仆（たお）れても、そのような聖霊の力で進んでもらいたい。

キリストは、

「自分は何もできません」

と言つてらっしゃる。

「神さまが来て、私を捕まえて、私に力を与えるから為さざるを得ない。今にお前たちは、私より大きな業をする。私がお前たちの中に入って、私が地上に居た時よりももっと凄いことをするぞ」と、そういうことです。

私は『無の神学』を書いて、誰にもこれは理解されなかった。誰も書評を書かない。書くと言った人も筆を投じてしまった。ということは、自分が本当にその境地に入らなければ書けないんです。

いつも私が皆さんに言っているように、「無が無限大」なんです。十字架で私たちはゼロで割られている。ヨハネ第一書にも出てくる。ヨハネは「十字架」という言葉はあまり使わないけれども、「宥め（なだ）の供物（そなえもの）」という言葉を使う。

「自分の意志を棄てて、奴隷意志となるから、本当に自由なんだ」

ということは、ルッターが『奴隷意志論』で書いた。彼は、

「自分の書いた一番大事なのはあの『奴隷意志論』だ」

と言っている。これはエラスムスの『自由意志論』に対して、そうではないといって書いた。哲学や道德の世界は自由意志でよろしい。けれども、本当の宗教の世界は奴隷意志にならなければダメです。キリストは神さまの奴隷意志になったから、しもべとなったから、本当に自由であった。天衣無縫であった。それは大自然よりも素晴らしい自由だ。

●神然・靈然・自然

私たちはその世界に入ると「靈然」である。キリストだけは「神然」である。自然界は「自然」、自然天然という。みな「然り」という世界です。神然り、み靈然り、天然り。神然という言葉はキリストだけです。我々はみ靈にあつて靈然の世界に入れられなければダメなんだ。



「35」(53分の35)

ということ。十字架(イザヤ書53章)という土台がなければダメです。そうすれば、この「35」(イザヤ書35章)の天的な現実が現象してくる。福音書は全部、キリストがこの「35」(天的現実)を現象して、最後に十字架で「53」(イザヤ書53章)を表わし給うた。そして、キリストはもの凄い生命、永遠の生命をもつて復活された。天界に往かれた。それから、その生命を聖霊をもつて与える。こちら側から御意を求めるのではなくて、上から御霊によって動かされないでは動くことができない。

西郷南州が、

「天を相手としろ」

と言った。「南州はそうだったでしょうけれども」ではない。我々一人びとりが、南州であろうと何であろうと、全部この福音の世界ではできるんです。仏教の偉大な坊さんたちのものでも、読むと楽しくてしょうがない。もちろん彼らに敬意を表します、みな実践した人たちですから。

ヒポクラテスは医学の祖です。紀元前460年頃から370年頃までの人で、はつきりした年数は分からない。西洋医学は「ヒポクラテスに帰れ」というわけです。東洋医学が実はヒポクラテスと同じようなところにきている。彼は、

「人間の本来持っている力および自然の力によれ。医者や薬は補助に過ぎない」

ということをはつきり言っている。それが化学的な力によって、すっかり本来の生命から遠ざかってしまっているから、どんなにそれが治ったように見えても、それは本当の意味においてその人の生命を生命らしくしていない。点滴にしる酸素吸入にしるそうです。

「私はそんなものはみな御免だ。自然死がいい。神さまが来いという時には行きま
す」

ということを私ははつきり言うつもりです。

「人間の本来持っている力と自然環境によって、生命は生命いのちすることができるとだ」

とヒポクラテスが言っているが、我々は、生命は神さまから賜っている。私たちを生命しているものは神さまなんだから。それを一番現したのがキリストなんだ。

大自然が、環境がこの生命と交流している。無農薬の野菜が身体にいいのはそういうわけだ。そういう在り方に戻らなければならないのに、もうそれが段々戻れなくなってきた。化学が自然環境を化かしてしまった。悪い意味でメタモルフオーゼを起こして変化を起こしてしまった。悪化させている。毒化させている。困ったことです。自然の草根木皮を薬にするところの東洋医学が本来いいわけです。

最近、生命を非常に尊ぶ人がいた。シュヴァイツァーです。あの人はアフリカの河を上っているうちに、ハタと靈感に撃たれた。彼は、

"Ehrfurcht vor dem Leben" (エアフルヒト フォア デム レーベン)



「生命に対するところの畏敬^{いけい}の念」
と言った。

「生命をもつと尊重しろ、皆これは神さまから賜っている」

と。だから、彼は虫一匹も殺さなかったという。皆それぞれ生を賜っている。私はチャップリンの映画を観ていたら、彼は毛虫を踏みつけなくて拾って薔薇の中に入れてやる。そういう光景を見て、ああチャップリンという人はそういうところの気持を持った人だなあと思った。ただその一つの行為でも、生命を持つているものに対する愛の気持です。

シュヴァイツァーの論文の中のエピソード、「跋^{ばつ}」（あと書き）のところに、

“Ethische Mystik der Ehrfurcht vor dem Leben”

「生命に対するところの畏敬の倫理的神秘主義」

という言葉がある。生命を尊重するということは深い道德であるという。“Ethische Mystik”は「道德的神秘観」と訳す。私は神秘主義という言葉は使いたくない。道德的神秘です。

●永遠の生命

誰でもが永遠の生命を欲しいわけです。死にたくはない。永遠の生命はヨハネ伝が伝えられている。永遠の生命、死んでも死なない生命は、キリストが証しておられた。幾人も復活させたでしょ、ヤイロの娘やナインの若者を。ラザロが一番あざやかだ。彼らはその後は相対的には死んだけれども、あれはみんな、永遠の生命の徴なんです。キリストのなさった事は全部、徴ですから。滅びざる世界の徴なんです。

「けれどもまた死んだではないか」

なんて、そんなことを言つてはダメです。最後の世界の徴を全部、キリストはあの2、3年間でもつてなさった。それがイザヤ書35章です。

その次は、ヨハネ伝6章33節、著作集第十巻の「我は生命のパンなり」（10月4日）の所です。

「神のパンは天より降りて生命を世に与うるものなり。∴イエス言い給う『われは生命のパンなり、我にきたる者は断じて飢えず、我に信じ入る者は断じて渴かず。∴それわが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣し給いし者の御意をなさん為なり。∴わが父の御意は、すべて子を見て信じ入る者の永遠の生命を得るこれなり。われ終末の日にこれを復活せしめん。∴イエス言い給う『まことに誠に、なんじに告ぐ、人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。』（ヨハネ6・33∴53）」

キリストは、

「私は永遠の生命だ。十字架にかかったつて死にはしない。

私を食らえ、私を飲め、私の肉を食らえ」

と仰った。最後の晚餐がそれですから。パンを裂いて、葡萄酒を飲ませた。あれはみんな



徴です。まあ大変な人だよ、お釈迦さんがどんなに偉くたって、キリストにはかなわない。私はもちろんお釈迦さんも尊敬します。けれども、キリストは全く例外者です。ただ一人の人、天一者だ。天的一者だ。

●「主さま」

私は「主さま！」と言って祈る。キリストは

「天に在す我らの父よと祈れ」

とおっしゃったから、教会では「父よ！」と祈る。いいよ、「お父さま！」だって。それはそれでいい。パウロも言っている、

「聖霊をいただかなければ、『アバ父よ』と祈れない」

と。それはそうだけれども、私はキリストに救われて、キリストが私の生命だから、「主さま！」と祈るよりか言いようがない。だから、「主さま」と私は言っているの、神さまはどうでもいいと言っているのではない。その後ろにはちゃんと神さまがある。「主さま」という祈りの時には、聖霊の中だから、その意味においてももちろん三位一体なんだけれども、観念的にそんなことを言っているのではない。私は、『エン・クリスト』誌38号にも書いた。私は涙になると。必ずしも涙が流れなくても、全身が涙みたくなってしまう。

「わが首を涙とせん」

とエレミヤが言っている。ところが、この涙が、その次に何になるかというと、火に変わる。感涙にむせんでしょうと、私の魂は烈々たる火に変わる。私は寝るときに床の上に坐って黙って祈る。あるときは十字架の形になることもあります。そうすると、火に変わると、身体は床の上にも床の上に居ない。霊界にグーッと魂がいつてしまう。「パウロさん！ヨハネさん！」と言って、親しく呼ぶようなことになってしまふ。しかし、「キリストさん」とは言わない、これは「主さま」です。

これはひとつには、私は80歳にもなったからだろうね、もう天が近いから。あなた方はまだそんなに天ではなくたっていいよ、まだ地がいい。まだ地でいいけれども、天地融合してください。私はもう死がちよつとも恐くなくなってきた。いつでも結構でございますと。ただ、詩を書きたいから、この詩を書かないでは、私は死ぬわけにいかん。

「第十巻を書いたら私はいつ仆れてもいい」

と書いた。絶対矛盾の自己同一です。いつ仆れても、「アーメン！ハレルヤ！」なんだ。と同時に、神さまは

「その詩を書くまではお前を殺さないぞ」

と仰ってください。これは私の使命だから。詩道、詩路です。道は天に通ずる。天道私路です。天道に私の路が相通ずる。天道に即すること。あなた方一人ひとり、自分の路が天道に即するような歩き方をしなかつたら、必ずひっくりかえってダメになる。



●真相^{まこと}

その次は、ヨハネ14章の「我は道なり」（10月25日）のところです。

「我は道なり、真相^{まこと}なり、生命なり。」（ヨハネ14・6）

私は「まこと」というのは「真相」と書いた。今日は「真」だけにしてしまった。「道、真命」と書いた。「真理」という言葉は私はあまり好きではない。この「理」という言葉は少し観念化するひびきを持つているから。「真相」、真の相^{すがた}、まことのすがたです。「相^{すがた}」というのは、外のすがたではない。全存在的ながたです。真相、これで「まこと」と私は読む。漢字は素晴らしいから、熟語にして、読ませる時には「まこと」でいい。「まこと」にもいろいろな「まこと」がある。「誠」もいい字です。言ったことが必ず成るといなのが「誠」だ。言ったことが成らないのは誠ではない。

「我は道なり、真相なり、生命なり」

と。素晴らしい言葉です。これはギリシャ語でもみんな定冠詞が付いている。

「私こそは本当の道だぞ、私こそは本当の本ものだぞ」

ということですよ。「まこと」は「本もの」でもいい。「私は本ものだぞ」と、それが一番いいかも知れない。それから、

「私こそは命だぞ。私に來たならば、死んでも死なないぞ」

と、さんざんヨハネ伝で言っている。だから、ヨハネ伝は永遠の生命の世界だと言う。使徒ヨハネの本質は、実は使徒ヨハネの本質ではない。キリストの本質の一つが使徒ヨハネという人間に貫いて、ヨハネの本質にされてしまったわけです。

私も死んでも死なない。「永眠」なんて絶対に書かせないから（笑）。眠りはしないんだ。私は永醒、永遠に醒^さめている。ボヤボヤしていたら出て来るから。

とにかく、ある召団で一人の人が本当に燃えていれば大丈夫なんだ。神さまは

「エルサレムに一人の真理^{まこと}を生きる者が在ったらエルサレムを許す」

と、エレミヤに言われた。

「汝等エルサレムの邑^{まち}をめぐるて視^みかつ察^{さつ}りその街^{まち}を尋ねよ、汝等もし一人

の公義^{ただしき}を行^ない真理^{まこと}を求^{もと}る者に逢^あわば、われ之（エルサレム）を赦^{ゆる}すべし。」（エ

レミヤ5・1）

この「一者」というのが大事です。あなた方一人ひとりが掛け替えのない一者となっていただかなければ。それが光となる。キリストの光が貫いている。あなた方一人ひとりは天下一品です。他人^{ひと}なんか見る必要ない。お互いさまに天下一品になって、お互いに尊重していく。お互いに尊重し、お互いに助け合う。これは最高の世界、天国、パラダイスです。詩を書いてまだ私は生きていたら——多分生きていると思うけれども——今度は自伝を書く。アウグスティヌスの『懺悔録』みたいな告白を書く。日記は必ずしも取ってないけれども、私は人から頂いた手紙は全部保存してある。ダンボールに幾つあるか分からない。



その手紙を読んで、「ああその時はこうだった」と、逆にそれでもって自伝が書ける。楽しみにしている。私から離れていった人もたくさんある。結構でございます。その時はみんな喜んでいたのである。私は一人も怨んでいません。人をうらんでいたら聖霊は働かない。

「汝をしいたげる者の為に祈れ」

とパウロが言っている。パウロは素晴らしい。

●「我を見よ」

「我を見た者は父を見たるなり。」（ヨハネ14・9）

「私を見た者は神さまを見たんだよ」

と、これが言える人は、キリストの他にいない。私たちは、

「我を見し者はキリストを見しなり」

と、ある意味においては言えます。けれども100%には言えない。しかし、使徒たちは、

「我を見よ！」

と言ったではないですか。「我を見よ」とは、

「我がうちに在るキリストを見よ」

ということですよ。

「私は罪びとだ。けれども、本当に見てみる。この罪びとの中に何者が光っているか、その光が見えるか」

というわけです。

「何ごとにもわが名に在って我に願わば、我れこれを成さん。」（ヨハネ14・14）

「名に在って」です。キリストの名に在って祈らないものはダメです。「名に在って」ということは、キリストの実、「名実」です。「主さま！」と呼ぶときには、主さまはそこに現在し給う。その現在し給う主のみもとで、あるいは「主の中で（エン・クリスト）」、主の中に投げ身して、そこで願う。「神・キリスト・我」という関係になる。この中で願えば必ず成る。現象しなくたって、必ず成る。現象するのは少し後かも知れない。直ぐかも知れない。そんな事は神さまの側だ。根源の現実では必ず成っている。

私は根源の現実と相対的な現実とがだいぶ近くなってきた。それは自分が偉いのも何でもない。そういう恵みの世界にだんだん入れられてきた。去年の夏の集会を本当にまともに受けとった人は、みんなもの凄いいことになっていく。私はキリストの中で白熱的にやってきた。だから、

「もう夏の集会はやりません。これが最後だからしつかりしてくれ」と言っただけ。

「父は他に助主^{たすけぬし}を与えて汝らと偕に居らしめ永遠に到らしむ。」（ヨハネ14・16）



「永遠に」とは、これも永遠の生命の世界です。「助主」とは聖霊のこと、「慰め主」とも言います。助けの霊、慰めの霊、執成しの霊です。

「助主、即ち父わが名に在って遣わし給う聖霊は、汝らによろずのことを教え、また我が汝らに語りしことを想い出さしめん。」（ヨハネ14・26）

「ああそうだった、そうだった」と、みんな分かってしまうというわけです。

私は阿蘇で聖霊のバプテスマを天界から受けた。全身しびれてぶっ倒れた。帰りの汽車の中で聖書を読んだらベールが取れてしまっていた。今まで何を読んでいたかと。

「聖書は聖霊によらなければ読めない本だ」

ということがはつきり分かった。

●聖霊の生命

我々の信仰は天界に向かってグングン伸びて行く。パウロが、

「日に日に新たなり」

と言った。ところが、「私の信仰は」なんて言って信仰を私しているのは、下向きのカーブになってしまう。手島さんや私を通して聖霊が働いて、どれ位の人たちが治ったか。脊椎カリエスが一晚で治ったりする。杖について来た人が帰りにはもう杖が要らなくなってしまう。狐の霊に憑かれた者に、

「聖名によって出でよ!」

と言ったら、ガタンと倒れて狐の霊が出ていく。それから按手して、今度は聖霊の世界に入る。私はいろいろな事を経験していますから。蛇の霊にとり憑かれたのは舌をペロペロ出す。何も恐くない。キリストはいかなる霊にも負けません。

私は本来、弱虫の泣虫なんだ。それがこういうことになってしまったのはどういうわけか。私は霊統の方からいうと、このヨハネの系統です。可愛そうな人を憐れむ気持は私にはある。

「恵福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。」（マタイ5・7）

「キリストに憐れまれん」という。ありがたいです。

「…我れ平安を汝らに遺す。…我往きて汝らに來るなり。」（ヨハネ14・27・28）

「聖霊としてやって来るよ。平安を汝らに遺す」

と。「シャーローム」（平安）です。

「お前たち自身が平安神宮になれ」

というわけだ。「聖霊の宮」とパウロが言っているでしょ。平安には力がある。「平安の神」と、ギデオンのところに書いてある。これは力を持っている。キリストの力は、力があるから負けない。

「永遠の生命」というけれども、この「永遠の生命」の實質は何かというと、これは聖霊です。聖霊が来ていないと、この永遠の生命が空転してしまう。死なない生命というのは霊生です。



聖霊の生命です。み霊が臨んで初めて、

「死んでも死なないことが来たなあ」

ということが実感できる。

「我れキリストと共に十字架されたり。もはや我れ生くるにあらず、キリスト、

わが内に在りて生き給うなり」

という、あのパウロの言葉です。即ち、十字架で贖われてしまったところに、み霊のキリストが、キリストのみ霊が入って来た。だから、永遠の生命は、これは霊です。今のヨハネの言葉にも聖霊のことが出ている。相連関しているわけです。

「主さまー」

と言って、十字架という門を通して向こう側に行ける。詩篇23篇のところ、聖霊の風の吹いている所です。そこで空気を吸っていれば、霊気を吸っている。これは永遠の生命の世界です。今の地球の大気と違う。だから、我々は霊気を、神霊のキリストの霊気を吸っていかなくてはいいかん。空気は汚れていたつていいよ、魂は霊気を吸っていかなくては。そうすると、その汚れた空気を身体の中で浄化してしまうかも知れない。それ位のが起きるよ。癌細胞もやつつけてしまう。癩病であろうと、何であろうと、キリストは死人までも甦らせた人だから。大変なものです。そういうケタの違った世界ですから。

使徒ヨハネが本質化された。本質を賜った。元来の使徒ヨハネの相対的な彼の中に聖霊がやって来たら、「永遠の生命」という生命的なものが本当に彼の本質となった。その生命の本質は霊である。旧約からのヨハネの霊統をずっと見ていくと、その人物を見ると、その人物の質が何か分かる。ヨハネという人の霊統、霊的な伝統というものはどういうものかという、一番先が旧約では父祖時代のヨセフ、エジプトに売られてしまったヨセフです。あのヨセフが兄弟たちに、

「あなた方は私をこんな所に売ったけれども、実は、神さまが私をここによこ

して、あなた方を助ける為だったんだよ」

と言った。このヨセフは本当に素晴らしい。こういうヨセフ。そして、ダビデ、エリシヤ、ホセア、エレミヤ、第二イザヤ、ヨハネ。そういうのが、ヨハネの霊統だと私は見ている。ダビデとヨナタンの間柄。ダビデがサウロにあんなに追いかけれながらも、「敵は本能寺」をやらなかつた。どこまでも彼は逃げ回っている。詩篇を見ても本当に深い魂の人です、大きな間違いもしたけれども。あんな大きな間違いをしても、

「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリスト」

と書いてあるね。楽しいね、あなた方と聖書を学ぶことは。語るも聞くも同じこと、その次元の中にグングン入れられて行くわけです。

